

尾崎秀実におけるインテリジェンス概念の革新¹⁾

鈴木規夫

(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

企業のネットが星を被い
電子や光が駆け巡っても、
国家や民族が消えてなくなるほど
情報化されていない近未来

—— 『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』 (1995)

はじめに

主権国家や国際諸組織が入り乱れ、それぞれの国益やイデオロギーを交錯させながら世界政治が展開し、「国家や民族が消えてなくなるほど情報化されていない」二十一世紀の現在、インテリジェンス概念の精緻化は、

われわれの知性の維持に欠くべからざる試みである。

一〇年前の二〇〇三年三月二〇日に開始されたアメリカのブッシュ政権によるイラクのサッダーム・フセイン政権への軍事介入は、イラク政府の大量破壊兵器保有がその第一義的な理由とされた。しかし、現在では、周知のように、そのような大量破壊兵器は存在しなかったばかりでなく、米英政府のインテリジェンス・コミュニティはその「存在しない事実」を当時から確認していた。²⁾

その一〇年後³⁾、現在進行しているアメリカのオバマ政権によるシリアのアサド政権への軍事介入表明も、アサド政権の化学兵器使用がその第一義的な理由とされているが、欧米のインテリジェンス・コミュニティはそれを確認できないとすでに繰り返し表明している。¹⁾二〇一三年九月の段階では、再び国連決議を回避して、オバマ政権は米議会承認を取りつけ、軍事介入を強行する姿勢を崩してはいなかったが、その後ロシアとの調停を進め、シリア情勢は奇妙な内戦状況を継続させている(二〇一三年一月現在)。

むしろ、インテリジェンスのもたらす分析判断が権力の政治的判断に反映されないこうした事態は、現実政治において人間集団の政策決定過程が常に合理的であるわけではないのであるから、しばしばありうる。

七〇数年前でも、満鉄調査部の「支那抗戦力調査」(一九三九―四〇年、具島兼三郎・伊藤武雄・中西功・尾崎秀実らが調査に参加)。「総篇」「政治篇」「戦時経済政策篇」「奥地経済篇」「外援篇」(全五篇)は、日中戦争において日本軍が蒋介石政権に対し圧倒的勝利を収めることができなことを結論づけていたが、結果は周知の如くである。

政治社会においてインテリジェンスへのコモンセンスが形成されるには、さまざまな段階がある。また、それが政策決定過程にどのような組織化されていくのかという問題も存在する。シンクタンクとしての満鉄調査

部がインテリジェンスの諸能力を発揮できたとしても、政府組織内にそれを有効化するシステムが存在しなければ、現実的な意味をもたない。もつとも、極めて高度なインテリジェンス・コミュニティを構築している現在のアメリカにおいてさえ、政権の政策決定の質が、七〇数年前の日本と大した変わらないという皮肉な事実は、インテリジェンスの理論化が難しい要因の一つであるといつてよい。

リヒャルト・ゾルゲと尾崎秀実のグループが行った情報収集とその分析結果報告が、実際その報告を受け取った政治権力の政策決定過程でどのように活用されたのかを検証する歴史研究は極めて意義深い⁵⁾。また言うまでもなく、かれらのインテリジェンスの実態を明らかにしていく試みはさらに重要である。

とはいえ、そうした歴史的検証の前提として、ここではむしろ、ゾルゲ・尾崎におけるインテリジェンス概念、とりわけ尾崎秀実についてのそれが、インテリジェンス研究理論上どのように位置づけうるのかについて検討したい。つまり、一九四〇年代に劇的にその機能と役割を現実的にも刷新するインテリジェンス概念への転換は、すでにゾルゲ・尾崎における「情勢分析的」情報収集活動において実現しており、それがいわゆる「スパイ活動」や「間諜報活動」とは明確に一線を画するものであったことを確認しておきたい。

インテリジェンスにともなう政治文化の差異はしばしば問題となるが、チェルマーズ・ジョンソンも言うように、尾崎秀実は、「一人の共産主義者として見れば、日本という国や彼の年代に存在したような典型的な共産主義者であったと単純にはいえない」(Johnson 1960:198)。したがって、そういう尾崎のインテリジェンス概念の性格を「日本的」と呼ぶには無理がある。では、それをわれわれはどのようなものであると理解すればよいのか⁶⁾。

一 インテリジエンス概念の転換とその革新

英国は一九〇九年一〇月に Secret Intelligence Service (S I S ≡ 通称 M I 6) を発足させているが、アメリカにおいて国家的なインテリジエンスの取り組みが垣間みられるようになったのは、現在米国インテリジエンスの典型的な教科書となっているローエンタールの『インテリジエンス』によれば、意外にもようやく一九四〇年代からであるとされている。

「一九四〇年代、インテリジエンスは新たな試みであった。行政府と立法府双方の政策決定者は、インテリジエンスを国家安全保障分野における新参者として考えており、陸軍や海軍においてさえ、インテリジエンスは比較的遅れて発展したものであって、二〇世紀となって相当の期間を経過してからようやく確立された。その結果、インテリジエンスは政府内に伝統ある確立された支持後援者を持たなかった。軍や F B I もともに、情報源を共有することには消極的で、さらにインテリジエンスは確固とした伝統やオペレーションの様式や流儀を持っていなかったため、第二次世界大戦と冷戦という尋常でない時期にこれを構築しなければならなかったのである。」(Lowenthal 2012: 12-13)

皮肉なことに、アメリカにおけるインテリジエンスの組織化を促進したのは、日本による「真珠湾攻撃」であった、とされている。今ではそれはインテリジエンスの失敗の古典的事例となっている。さまざまな信号を見落とし、重要な情報が各省と各機関の間で共有されず、政策決定者は「鏡像効果(自己イメージを相手に投影すること)」*mirror imaging* によって東京における現実を察知することができなかったというのである (Lowenthal 2012: 19)。

この「真珠湾攻撃見落としの失敗」が（九・一一）において同じように起きたという議論もある（Wirtz 2002）。ただ、「インテリジェンスの成功か失敗か」それ自体はともかく、（九・一一）も「真珠湾攻撃」も、それを契機としてアメリカ政府が実施した戦争は、ともにそれまでの戦争とその性格が大きく異なっていた。インテリジェンスの「失敗」は、起こってしまった戦争の性格の差異の反証として提示されてきたのであり、そこにインテリジェンス自体の革新を促す契機が存在したのである。

たとえば、アメリカにもたらされていたさまざまな「情報」の中には、「中共諜報団事件」の中西功などによる尾崎ルートのももの存在したであろう。にもかかわらず、少なくとも当時のアメリカ政府の機構内では「真珠湾攻撃」を予測できなかった。それがインテリジェンスの「失敗」として受け止められた。だが、ウィリアム・ドノヴァンによって率いられた情報調整官（COI）と戦略諜報局（OSS）の主要な関心がそもそも欧州戦線にあったように、むしろ戦略的には、ルーズヴェルトが日本による対米英開戦を、欧州大陸におけるドイツとの戦争の正当化に応用したのだということも可能である。政策決定過程においてアジア太平洋方面での情報活動への関心が低かったのかどうかというより、ここでむしろ重要なのはインテリジェンスによる総合的な分析視角の問題なのである。それは単なる軍事情報の把握ばかりではない、より高度なミッションをインテリジェンスの機能に付加するようになった。

この点、当時の尾崎はアメリカの状況をどのように分析していたのか。

「アメリカ経済は既にその急激なる軍備拡張生産への突入によって、人工的な景気を造り出し、軍需工業家を充分利得せしめて来た。彼等にとつては戦争に突入する以外にこの不自然好況を持続させる方法はないのである。かつ、ドイツの勝利のまま大局を結ぶ場合、欧州市場、並びに南米市場等におけるアメリカの地位は著

しく困難となることが予想せられるのである。とはいへ勿論アメリカの政治指導部にとつても現在の情勢に対する深い危惧が存在し迷ひを生んでゐることを否定するものではない」(尾崎 2004: 362, 363) と同時に、「日本と抗争を続けつつある支那は英米国際戦線のまさに一翼に立つものであって」、「支那問題」も、「アメリカはイギリスと共にドイツとの死闘を世界的規模に於て戦いつつある」という「その世界政策の観点からこれを理解すべきであろう」(尾崎 2004: 374, 375) としている。

そして、「戦の性質は一方が完全なる屈伏に到るまでは終結することなきをもつて特質とする。旧世界の転換期における矛盾は極めて深刻である」(尾崎 2004: 386) として、すでにアメリカが「長期戦争の遂行をもつて有効なる方式であるとの結論に到達したものと見る」(尾崎 2004: 401)。さらに、「英米列強は日本の石油や鉄の保有量が底をつくのを待つて、それから中国での戦争を終わらせるために日本をたたく」(Johnson 1990: 161) という予測を示して、日本の政策決定者には、対ソ侵攻を抑止し「南進」を勧めていた。

この意味では、尾崎はインテリジェンスの枠を一步踏み出し、他の諸情勢への意図も加味して政策決定過程に意識的に関与していたといえる。インテリジェンス自体と政策決定過程への関与との複雑な問題は、ゾルゲや尾崎の歴史的評価をめぐっても、現代においてもなお議論の多いところである。

一般に、アングロサクソンのインテリジェンス・コミュニティの形成において、共有されていくインテリジエンス概念とは、第一に、国家安全保障にとつて重要な特定類型の情報が要求、収集、分析され、政策決定者へ提供される一連のプロセスであり、第二に、そのようなプロセスによつて産出されたもの・ことに他ならず、さらに第三に、カウンターインテリジェンス(敵対勢力の破壊・怠業活動などの謀略活動から、人・物資・施設を防護するための諸活動を含んだ敵意あるインテリジェンスを無効にするための活動)の活動によつて、そ

の情報またはプロセスを保護すること、第四に、合法的な権限に基づいて要請されたオペレーションを実施することである (cf. Lowenthal 2012: 9)。

ここでローエンタールがまとめているインテリジェンス概念は、言うまでもなくアメリカがその制度化をはかって半世紀以上の経験を積み重ねて抽象されたものであるが、尾崎の実践した諸活動を支える自己認識においても、大いに重なりあう部分を持っているといえる。

しばしば、尾崎は表と裏の顔を持ち、分裂した人格構造を有していたかのような理解される。だが、軍事的思考から一定の距離をもち、むしろ政策的志向を有することにおいて、そのインテリジェンス概念は、一九四〇年代以降次第にソフィストケートされていく、インテリジェンス・コミュニティのコモンセンスの素質と尾崎の活動には通底するものがある。

尾崎は訊問調書においても（一九四二年四月一日付等）、個々の情報の価値は、それがどのように重要な機密に属していても決定的な意義をもつものではなく、先ず何より自分自身の一定の見解を定め、全体的包括的事実、或は流れの方向を作り上げるために、個々の情報を参考にしていく、という意味の「態度」について述べている。そればかりでなく、自分自身が総合判断の一個の情報源泉であるとまで断言している。この情報源泉の主体化は、政治権力内における自らの位置をよく自覚したものであり、これを「スパイ」として単純化できない。

インテリジェンスが、安全保障にとって重要な特定類型の情報が要求、収集、分析され、政策決定者へ提供される一連のプロセスであるとすれば、尾崎はその持てる能力によって、そうした分析総合を行ない、同時代への的確な認識を示していくことにおいて、表も裏もなく実に一貫していたのだともいえる。

尾崎の場合、問題は、その分析結果の提供先である「政策決定者」の措定が、誰に、或はどこにあったのか、である。近衛のブレーンとしての尾崎が、近衛の政策決定を阻害するようなカウンターインテリジェンスを行っていたのかといえ、そうした痕跡は見出し難い⁷⁾。同時に、当時の検閲状況や言説空間の制約があったといふことを慎重に考慮しつつ、近衛のブレーンとしてのインテリジェンスが、ゾルゲへの分析結果を導くために提供されていたものと著しく矛盾するものであったのかといえ、そのようにも言い難い。不用意な弾圧を蒙ることを避ける工夫は施したものの、「階級的には敵対勢力」である「自己の現に属する帝国主義国家」の「権力構造の中で生き、思考し、行動しながら、彼自身の理想を持ち、彼の生きた時代の重大な事件に対する彼自身の判断に基づいて、行動の原理を引き出した」(Johnson 1990: 198)、ことに変わりはなかった。

ここから、ゾルゲがそうであったように、一種の二重スパイ説のような評価も生じうる。けれども、尾崎の措定していた「政策決定者」は、より合理的な政治判断を下しうると「想像された〈人民〉」であったのだとすれば、尾崎のインテリジェンスにおける動機が何に支えられていたのかを理解することも可能である。その実践活動において緻密なりアリストであった尾崎は、一種の理想型としてのインテリジェンスに伴うヴィジョンで自らを支えていたのだともいえよう。「尾崎は理想に殉じた高潔の士であり、愛国者の典型である」(高田裁判長)という言葉が、それを見事に凝集して表現している。

もともと、なぜ、当時の世界共産主義運動がそれほど強力に人々の想像力を喚起するものでありえたのかについては、別途の検証を要するが、尾崎のヴィジョンの存在を、逆に、政治決定のすべてがインテリジェンスに依存するわけではないという、インテリジェンスの一種の弱点という視点から見ると、ローエンタールの言う「政治化されたインテリジェンス」(*politicized intelligence* (cf. Lowenthal 2012: 151-154)) という問題と

して考えることもできる。

政策決定者は、提示されるインテリジェンスを自由に拒否しまたは無視しうる。「そして、あなたがたは真理を知るであろう。そして真理はあなたがたを解放するだろう」(CIA本部旧入口にある『ヨハネによる福音書』第八章第三二節)としても、現実の権力関係の逆転はない。インテリジェンス担当者は自らのインテリジェンスに基づいて政策提言を行うことは許されない。さらに、インテリジェンス担当者が政策決定者の選好する選択肢や結果を支持するために、本来客観的であるべきインテリジェンスを意図的に修正してしまう危険もある。こうした一連の現象が、「政治化されたインテリジェンス」である。

尾崎は、近衛のブレーンとしてのインテリジェンスにおいては、自らのインテリジェンスに基づいて政策提言しているという意味で、また、そのヴィジョンの故に、この「政治化されたインテリジェンス」に明らかに陥っている。それによって、「コミンテルン」へ提供された情勢分析においては、実は、インテリジェンスそれ自身の客観性を損なうことにもなり、「自分自身が総合判断の一個の情報源泉である」という自己矛盾に陥ることにもなる。だが、尾崎自身はそれを弱点とは考えていない。

ローエンタールはその他にも次の三点の弱点をあげている (cf. Lowenthal 2012: 79)。第一に、インテリジェンス分析が分析対象の問題についてその時点における常識と同程度にしか精緻でないかもしれないという点である。第二に、分析があまりにデータに依存し過ぎていると、データに現れない部分を見落とすことになる。第三に、先述したような「鏡像効果」*mirror imaging* の問題である。他国ないしは他国の個人は、自国または自分たちと同じように行動すると想定すると分析を損なうということである。関係者が自分たちと同様に「合理的」であると想定しがちであるが、現実はずしもそうではない。非合理的の主体や合理性の基準の異

なる主体については分析困難に陥る。

この三つの弱点について、尾崎におけるインターナショナルがどうであったのかはまた改めて検討する。ここではさらに尾崎のヴィジョンがいかなるものであったのかについて見ていくことにしよう。

二 尾崎秀実のヴィジョン

— ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムとの相克とその統一 —

先に引いた、「尾崎は理想に殉じた高潔の士であり、愛国者の典型である」という言葉は、尾崎のインターナショナルの特徴を考える上でも重要である。

リアルな革命家としての尾崎が、「天皇制」を即座に打倒するとは言わないという点にも、われわれは注視すべきであろう。一九四二年四月一四日付検事訊問調書には、以下のような「国体に対する考へ方」が記録されている。

「私一個の私見を申しますならば、現在の日本の政治体制の本質を規定する言葉として、「天皇制」なる言葉が正しいかどうかには疑を持って居ります。日本の資本主義の現段階の特徴は、発達の後進性よりも寧ろ内部の不均衡性にあるかと思われれます。且封建的な勢力が其の儘資本主義的な強力なる勢力として変化転化した処にあらうかと考えます（……）現段階に於ける日本の政治支配体制の上で「天皇」の憲法上に於ける地位の持つ意義は、実は擬制的なものに過ぎなくなりつつあるように見受けられるのであります。（……）更に一步進めて共産主義者としての戦術的考慮から見ても、「天皇制」打倒をスローガンとすることは適当では

ないと考えます。其の理由は日本に於ける「天皇」が歴史的に見て直接民衆の抑圧者でもなかったし、現在に於て如何に皇室自身が財産家であるとしても、直接搾取者であるとの感じを民衆に与へては居ないという事実によって明瞭であろうと考えます。(……) 私達は世界主義者であつて、言はば理想的な世界大同を目指すものでありまして、国家的対立を解消し世界的共産主義社会の実現を目指しているのであります。(……) 世界の共産主義大同社会が出来た時に於ては、国家及び民族は一つの地域的或は政治的結合の一位として存続することになるのであります。斯くの如く私は将来の国家を考えて居るのであります。此の場合所謂「天皇制」が制度として否定され解体されることは当然であります。併し乍ら日本民族の内の最も古き家としての「天皇家」が何等かの形を以て残ることをも否定せんとするものではありません。」(尾崎 2004: 417-420)

尾崎におけるこうした「天皇制」理解のリアリズムは、日中戦争が世界戦争の一環としてのみ解決されるといふ時代認識と通底している。

「東亜共栄圏確立の前提は東洋に於ける英米資本勢力を駆逐するのみでなく、その民族支配の旧秩序方式をも根絶せしめる事にある。支那問題と南方問題との含む基本的意義はその民族問題に在る。此等の地域に於いて植民地的支配に呻吟して来た諸民族の自己解放こそ、東亜新秩序の不可欠なる要素であり、支那民族の解放と自立を通じて日支両民族の正しき協同こそは、東亜共栄圏確立の根幹を成す所の第一前提であると確信するのである」(尾崎 2004: 330) という尾崎は、民族問題と農業革命の問題との緊密なる連関に、日本の自己革新を結びつけている。

「被圧迫民族国家と植民地民族問題」を「世界新秩序の解決すべき最も重要な課題の一つ」(尾崎 2004: 380) とする尾崎は、「日支両民族の高次の結合は、今日世界史的事実となりつつある所の、世界新秩序建設の中に

於いてのみ達成され得る」(尾崎 2004: 326) としている。

尾崎のインテリジェンス概念から導かれるこの「日支両民族の高次の結合」なるヴィジョンは、ナショナリズムのインターナショナルリズムによる超克という基本軸を有し、その諸前提を構築するのは、日・中の抗争と相互作用を通じ、抵抗する中国側だけでなく侵略者としての日本自身の社会変革の可能性を見出そうとするところに、大きな特徴がある。

「中国統一化」論争の構図を継承した尾崎は、次のような展望において思考していた。すなわち、中国は国家として敗北するが、中国社会の抵抗はむしろ強化される。日本は正規軍同士の戦争には勝利するが、中国社会の抗日運動に直面せざるをえず、戦争は長期化する。その長期化した日中戦争を通じてむしろ中国の統一化が進み、国民党はその担い手とはなれず、中国共産党がそれを担う。その後の史実に照らしても実に正確である。

ただ、「中国統一化」の過程と、帝国主義化した日本のナショナリズムの過程とのギャップについて、尾崎がどのような分析をしていたのか定かではない。少なくとも、一種の「東亜革命」を志向して東アジア地域におけるナショナルな枠組みを解体した後に、社会主義的秩序形成を企図していた痕跡は明確である。尾崎は、その「東亜新秩序社会」構築のためには、「ソ連」、「資本主義機構を離脱した日本」ならびに「中国共産党が完全にヘゲモニーを握った形の支那」の三民族の緊密な提携援助が必要であり、三民族の緊密な結合を中核として先まず東亜諸民族の民族共同体の確立を目指す、としていた。

そして、「此の世界資本主義社会崩壊の過程に於て重要な意義を持つべき所謂東亜新秩序社会の実現は、支那事変を契機として其の決定的なものであると云うことを私の最初から信じて疑わなかったところのものであり、其の時機に於けるソ連との提携援助に付ては幸いにして私が十余年来ゾルゲとの諜報活動を通じてコミ

ンテルン乃至ソ連邦の有力なる部門と密接に結び付いて居ると云う事実に依って容易であると思つて居りましたし、其の場合に於ける支那との提携に付ても充分な自信を持つて居つたのであります」(尾崎 2004: 413-415)、としていた。

これが果たしてたんなる「幻視」(米谷匡史)であったと言えるのかどうか、さらなる緻密な議論を必要とする。アングロサクソンの金融資本主義機構からの離脱と新たな世界秩序の構築という視座からすれば、現代におけるいわゆるBRICSの形成に見られるように、尾崎のヴィジョンは、あながち飛躍したロジックではなかったからである。

小活—アングロサクソンのインテリジェンス概念からの離脱の意味

よく指摘されるところであるが、社会科学的研究において、歴史研究と理論研究とは、ある種のアンビバレントな関係にある。

一九九〇年代末、米ソ冷戦状況の劇的な変化もあつて、国際関係を専門とする歴史家と政治学者が一堂に集まり、その接点と相違とを探るために討論が行われたことがある。その結論は、「政治学者は歴史学者ではないし、またそうなるべきでもない。両分野の間には、埋められない認識論上のまた方法論上の溝が存在する」(エルマン&エルマン 2003: 32)、ということであつた。

他方、「歴史学者の務めとは、疑わしい典拠の種々雑多な山を選びわけ、自身の慎重な専門的評価の結果を他者に与えることにある。そして彼らは、歴史学者が書き記したものを信頼したことに対し、社会学者を責め

ることにはない」(Marshall 1964: 35) といった議論、歴史家であるF・ブローデルの歴史家自身に対する訓戒、「自分の研究する世紀、『自分の』世紀から抜け出そうとしない歴史家にありがちなように、強盗行為は十五世紀のコルシカに、あるいは一四世紀のナポリに出現するのだなどと言わないようにしましょう」といった指摘もある。とりわけ、あらかじめ何をしたのか察知されないことを前提としたプロセスであるインテリジェンスが、歴史的研究対象となる時、何をどのようなものとして構築していくのか、まずその事実を確認するだけでも膨大な作業が要求される。

『鏡の国のアリス』でのアリスと白の女王とのやりとりのように、「何かが起こる前にそれを思い出すことなんてできるわけがありません」、「後ろ向きにしか働かない記憶なんて、何と貧弱な記憶であること」、つまりインテリジェンス研究にはあらかじめ時系列複合を想定しておく必要がある。

一九四二年になって「国際諜報団事件」として司法省が公表した「事件」は、「企画院事件」や「中国共産党諜報団事件」などとリンクしていることは言うまでもない。さらには、戦後冷戦期においてウイロビーによって「再構築」された「ゾルゲ事件」とそれをめぐるその後の米ソ両陣営の政治利用による展開などに鑑みれば、ますます時系列複合の問題は複雑化していくであろう。最近では、インテリジェンス研究を一種のアングロサクソンの政治文化そのものであるととらえつつ、それ以外の政治文化におけるインテリジェンスを分析するの一種の解釈人類学的アプローチを導入しようとするものまで現れている (Davies and Gustafson 2013)。

本稿では、アングロサクソン政治文化の中ですでに制度化されているインテリジェンス概念と尾崎の思考方法との共通性を確認したに過ぎないが、そこからさらに展開される尾崎の実践とヴィジョンとは、むしろインテリジェンス概念そのものを、アングロサクソンの呪縛から切り離していく契機となるにちがいない。

換言すれば、当時の尾崎の見通しとは異なっており、第二次世界戦争後の世界は、半世紀ほどの冷戦を経て、民族問題も農業問題も何の解決も見えないまま、再びアングロサクソン金融資本主義の跋扈する恒常的戦争状態が継続することになってしまっているが、「日中戦争」の未解決な諸問題の再認によって、尾崎の「日中戦争が世界戦争の一環としてのみ解決されるという時代認識」の有効性が再確認されるような時代を、われわれは今生きているのだともいえるのである。

注

- (1) 本稿は、二〇一三年九月一六日上海師範大学における〈ゾルゲと上海国際情報戦国際シンポジウム〉(ゾルゲに関する中国初のシンポジウムである)での報告をもとにまとめられたものである。
- (2) これについてはすでに多くの報道があるが、例えば、BBCやインターファックス通信も繰り返し報道している(http://japanese.ruvr.ru/2013_03_18/108300333/)。二〇一〇年にはこれを主題とした映画『グリーン・ゾーン』も製作され(<http://www.universaldstudiosentertainment.com/green-zone/>)、アメリカ社会に大きな論議を起こした。
- (3) 二〇年のサイクルでアメリカやイスラエルの大軍事行動が組織されて生じる中東における災禍は、アメリカ軍の残留兵器の廃棄処理サイクルと一致しており、軍需産業の再生産過程に組み込まれている結果なのである。「という中東知識人のコモンスセンスは、あながち根拠のないことではない。」
- (4) 例えば、二〇一三年九月二日 HuffPost World 日本語版 記事を参照。 http://www.huffingtonpost.jp/2013/08/31/syria-strike-chemical-weapons_n_3849570.html?i=Japan&utm_campaign=090113&utm_medium=email&utm_source=AlertJapan&utm_content=FullStory
- (5) 例えば、加藤哲郎「国際情報戦の中のゾルゲ」尾崎秀実グループ——リュシコフ亡命、ノモンハン事件、シロトキン

- 証言——」参照。 <http://homepage3.nifty.com/katote/mongol.html>
- (6) 尾崎＝ゾルゲ裁判は、そういう視点からも極めて興味深い。そもそもインテリジェンスのカルチュアが異なる事態を、どのように裁きうるのかといった問題を孕むからである。
- (7) もっとも、対ソ開戦があるか否かを探る過程では、さまざまな情報からその可能性がないことを断定しつつも、たんに客観的な分析だけではなく、近衛ブレイン周辺の討議では「北進論」を批判し、「南進」による英・米帝国主義打破をすすめる政治工作も行っていることをどう評価するのか、といった問題は残る。その意味でも、尾崎の公表された最後の時評である、「大戦を最後まで戦ひ抜くために」(『改造』一九四一年一月号)を、「私見では第二次世界戦争は「世界最終戦」であらうとひそかに信じている。この最終戦を戦ひ抜くために国民を領導することこそ今日以後の戦国政治家の任務であらねばならない。」と結んでいることをどのように解釈するのが重要になってくる。

【参考文献】

- Byron, John and Pack, Robert, 1992, *The Claws of the Dragon: Kang Sheng, the Evil Genius behind Mao and His Legacy of Terror in People's China*, Simon & Schuster. (田畑暁生訳 2011 『龍のかぎ爪 康生』上・下 岩波現代文庫)
- Davies, Philip H.J. and Gustafson, Kristian C. eds., 2013, *Intelligence Elsewhere: Spies and Espionage outside the Anglosphere*, Georgetown University Press.
- Jeffery, Keith 2010, *MII: The History of the Secret Intelligence Service 1909-1949*, Bloomsbury.
- Johnson, Chalmers, 1990, *An Instance of Treason: Ozaki Hotsumi and The Sorrow Spy Ring, Expanded edition*, Stanford University Press. (篠崎務訳 2013 『ゾルゲ事件とは何か』岩波書店)
- Lowenthal Mark M., 2012, *Intelligence: From Secrets to Policy*, Fifth edition, SAGE (茂田宏監訳 2011 『インテリジェン

- スー機密から政策へ―慶応義塾大学出版会)
- Marshall, Thomas. H. 1964. *Class, Citizenship, and Social Development*. Doubleday & Co.
- Wirtz, James J. 2002. 'Déjà vu? Comparing Pearl Harbor and September 11'. *Harvard International Review* 24/3, pp.73-77.
- 石井知章・小林英夫・米谷匡史編著 2010 『一九三〇年代のアジア社会論―「東亜協同体」論を中心とする言説空間の諸相』
社会評論社
- 石堂清倫 1999 『歴史の中の尾崎・ゾルゲ事件』『国家機密法に反対する懇談会だより』No.6 一九九一年八月二四日土曜
日 <http://homepage2.nifty.com/ikariwoutae/startup/sisdoul.htm>
- 今井清一・藤井昇三 1983 『尾崎秀実の中国研究』アジア経済研究所
- エルマン、コリン&エルマン、ミリアム F 編(渡辺昭夫監訳) 『国際関係研究へのアプローチ―歴史学と政治学の対話』東
京大学出版会
- 尾崎秀実 2004 米谷匡史編 『尾崎秀実時評集―日中戦争期の東アジア―』平凡社
- 丸山昇 2004 『上海物語 国際都市上海と日中文化人』講談社学術文庫
- 三谷太一郎 2013 『学問は現実に関わるか』東京大学出版会
- 原田泉・山内康英編著 2005 『ネット社会の自由と安全保障 サイバーウォーの脅威』NTT出版

